

2022 年度日本認知科学会第 39 回大会

詩が自律するとき - 情景と体感の往還がもたらす創起 -

Autonomy of a poem - Generating new objects by conceiving of scenes and feeling somatic senses reciprocally -

○今宿 未悠¹, 諏訪 正樹²

1 慶應義塾大学 政策・メディア研究科, 2 慶應義塾大学 環境情報学部

○Mew Imashuku¹, Masaki Suwa²

1 Graduate School of Media and Governance, Keio Univ. 2 Faculty of Environment and Information Studies, Keio Univ.

概要: 詩作においては、「詩の自律性」を感じる事が重要である。「詩の自律性」とは、詩の書き手が、詩の方から書くべきものごとを次々と示されると感じる現象である。本研究の目的は、「詩の自律性」を感じる時筆者に生じている認知を探究することである。筆者は詩作の実践をみずから行い、実践で生じたものごとを一人称視点に基づいて考察することを繰り返した。その結果、詩の世界に想像上の身体を没入させ、情景と体感の往還を繰り返すことで新たな「もの」の創起が次々と生じるとき、「詩の自律性」を感じるのだとわかった。

キーワード: 詩作, 創造性, 身体性, 一人称研究

1 はじめに

1.1 私¹と詩の関係

私はアマチュアの詩人である。月刊詩誌『現代詩手帖』の「新人投稿欄」²にて作品が掲載されたり、全国の大学生が合同で出版する詩集『インカレポエトリ』³に作品を寄稿したりしている。

私は現在、修士課程 1 年生である。学部 1 年生の時から詩を書き始め、学部 3 年生で慶應義塾大学にて詩の授業を受講したことをきっかけに、本格的に詩にむきあうようになった。

1.2 詩とはなにか

本研究の問題意識について論じる前に、そもそも詩とはなにかを簡単に説明する。

私が本論文で詩と書く時、それは「現代詩」を指す。図 1 に示すのは、私が大学 3 年生の時に書いた、4 連 8 行からなる短い詩である（連とは、詩における意味上のまとまりのことである）。

怖くなるとき
暗闇の淵で鳴った黒電話の
余韻に引き摺られた静寂を聴くとき
おとつい見舞いに受け取った百合の
花弁がぼとりと落ちてひそかに乾き始めるとき
理科室の隅に在ったねずみの
生を引き伸ばさせたホルマリンを嗅ぐとき
今にも壊れてしまいそうなあなたの
わたしがそっと触れてやさしく抱きしめるとき

図 1 詩「怖くなるとき」

現代詩は、近代において形式主義化した詩の反省から生まれたとされる。詩作にあたって明確なルールはない。そのため、現代詩とは何かという積極的な定義もない。

私は現代詩について、作品の意味や伝えたいメッセージを問うことは野暮であると考えている。一つの詩に普遍的な意味は存在しないし、詩の書き手で

¹ 本研究は、一人称視点を捨て置かずには研究対象に向き合う「一人称研究」であり、本稿では研究対象に向き合った過程を「物語」として記述する（1.3にて詳述する）。ゆえに、本稿では筆者を「私」と称する。

² 全国のアマチュア詩人らが新作を投稿し、プロの詩人の審査を経て掲載が決定する。毎月の掲載倍率は 100 倍以上で

ある（例えば、私が掲載された 2022 年 2 月号においては 931 篇の応募のうち 8 篇が掲載に至った）。

³ 全国の大学にて、詩や表現論などの講義を受講する学生たちの作品を集めた詩集。実際に詩人として活躍するかたわら、各大学の教壇に立つ教員が選者となって編集が行われる。

すら詩の意味を論理的に捕捉していないことがある。それよりも重要なのは、描かれるものごとそのものの生々しさや実在感、手触りである。生々しい詩は読み手の身体に直接訴えかけ、多様な読みをもたらす。

1.3 本研究の問題意識：「詩の自律性」を感じる

詩作の経験で忘れられないことが、大学3年生の春に起きた。その日、私はいつものように机の上にノートを広げペンを握り、詩になりそうな言葉を断片的に書いていた。するとある瞬間、今まで経験したことのない感覚に襲われた。私がノートに詩を書いているのに、まるで詩に書かされるように感じたのである。詩の方から何か「書くべきこと」が示されているような気がして、私はそれに適う言葉を掴んでノートに書き付けることを一心不乱に繰り返した。その結果、4連8行の短い詩が完成した(図1に示した詩である)。我に返りふと時計を見ると、5分ほどしか経っていない体感であったが実は1時間半以上経っていた。

「詩に書かされる」感覚はいわば、詩の書き手が書く対象である詩の方に主体性を感じ、あたかも詩が生物であるかのように感じる現象である。以後、これを「詩の自律性」を感じる体験、と称する。上述した体験ののちにも、私は詩を書く中で何度か「詩の自律性」を感じた。そして、詩作において「自律性」がいかに重要であるかについて、二つの観点から実感することとなった。

一つには、「詩の自律性」を感じている時の方が、力が抜けて楽に/自由に書ける感覚があるということである。書くべきものが次々と浮かび、私はそれを追いかければよい。「自律性」を感じていないと、次は何を書くべきか…と考え込んでしまい疲れる。

もう一つには、「自律性」を感じながら書いた結果完成した詩の方が、自分も納得するし、授業の講師や友人らから評価されることが多いということだ。「自律性」を感じられなかった詩は予定調和的になりがちで、まるで言葉が死んでいるようだった。

以上のように、詩作において「詩の自律性」の感覚は重要である。ただ、詩は生物ではないのであくまでも私の主観的な認知によってこのような「詩の自律性」の感覚が生じているはずである。「詩の自律性」を感じる時、私に何が起きているのだろうか？

⁴ 諏訪、青山、伝[2020]は、認知の研究において人が「生きる」様のリアリティにしかと向き合うためには、従来の科学的/客観主義的なアプローチのみならず、一人称視点や二人称視点からの記述によるアプローチも必要であると強く訴え

1.4 暗黙知を探究する一人称研究

当時の私にとって、「詩の自律性」を感じる体験は不確かなものだった。自分がいつ「詩の自律性」を感じているのかについてはわかるものの、それがどういった現象なのかうまく言葉にできなかつたし、その発生は制御不可能だったのだ。

このように、知ってはいるがどのように知っているかを言葉にできないような知は、暗黙知[ポランニー 2003]である。

暗黙知を探究し、顕在化させようとする一つの方法として、諏訪ら[2015]の提唱する一人称研究がある。一人称研究とは、「あるひとが現場で出合ったものごとを、個別具体的状況を捨て置かず、一人称視点で観察・記述し、そのデータをもとに知の姿についての新しい仮説を立てようとする」研究手法である。近年、人の有する知にまつわる研究は、客観的な立場から何らかの実験・観察・分析を行い普遍的/再現可能な結論を導出しようとする近代科学的なアプローチによって行われることが多い。しかしながら、暗黙知は状況依存的/再現不可能であり、その知を有する人の固有な身体に深く根ざしている⁴。

「詩の自律性」を感じる体験もまた、そうした知の性格を孕みつつ生起するものであろう。現に詩を書く行為は、書き手の生活文脈や価値観、普段接している語彙、発話や呼吸のリズムなどに密接に結びついており(=知の身体性/個人固有性)、一度書いた詩はもう二度と書けない(=知の状況依存性)。「詩の自律性」は、一人称視点で個別具体的な観察・記述を行う研究手法によってこそ探究すべきはずだ。

1.5 本研究の目的

本研究の目的は、私が詩作の実践を繰り返し行い、その実践で生じたものごとや考えたものごとを個別具体的に観察・記述することを通じて、「詩の自律性」を感じるとはどのような現象なのか、その知のすがたに探究のメスを入れることである。

1.6 本稿の構成

本稿では、「詩の自律性」を感じる認知を明らかにするために私が試行錯誤した過程を克明に記録し、「物語⁵」として示す。「物語」は大きく2つの期間に分けられる。以下表1に、それぞれの期間が該当す

ている。

⁵ 諏訪と藤井[2015]は、「論文はからだでつくった知を主張する場」であるとし、そういった知を主張するためには従来

る時期とその概要を示す。

表1 「物語」の期間と時期、その概要

期間	時期	概要
I	2021年 2月~7月	「もの」を描くことが詩の原則 なのだ気づく。
II	8月~10月	「もの」を描くには情景と体感 の往還が重要であると気づく。

2 期間I: 「もの」を描く

2.1 詩のスランプ

本研究が始動したのは2021年の2月である。「詩の自律性」を感じる自らの認知を明らかにしたい！と意気込んでいた私は、研究を始めてまもなく1つの大きな問題に直面する。スランプに陥り、「詩の自律性」を感じられなくなってしまったのだ。そして駄作を連発することになった。私がスランプの時に書いたある詩の一節を以下に示す。

記憶だけが美しく保たれたまま
生活は目まぐるしく生き死にを繰り返す
(中略)
あなたはまなざしていたのだろうか
何も残らないより何かが残ってしまうことの方が
幾分も残酷であることを
しまいどころのない気配を抱えたわたしの手は
もうほかには何も持てない(下線については後述)

実は、下線を引いた語句の背景にはある具体的な私の経験が存在する。その経験とは、一ヶ月かけて制作した屋外展示の芸術作品が展示期間中に何者かによって破壊された経験である。破壊されたとの報を受けた時、私は「どうせ悲しい思いをするのなら、最初からこの作品を作らなければよかった。作品自体は破壊されて見る影も無いのに、私の制作の記憶だけは残っている。その記憶によって、私は悲しい思いをしている。記憶が全て消えてしまったほうが楽なのに。」と考え、生活をする中で何度も反芻していた。

詩を書く際には、この考えを凝縮させ「何も残らないより何かが残ってしまうことの方が幾分も残酷である」と書いたのだった。詩の中には、このように過去の考えから生まれた語句が頻出した。リアルタイムに言葉が湧き出てこなかったのも、過去のストックで苦し紛れに補うしかなかったのだ。

の論文の形式だけでなく物語も奨励されるべきであると論じる。また、堀内ら[2020]は、物語形式の論文を書く意義について、書き手が「生きる」中で醸成した知やそれに内包する

当時、詩の授業の講師でもある詩人・杉本徹は、私のスランプを見抜くように次のような指摘をした。

近作は総じて、なんとなく苦しげな気はします。ただ、そのことは、後一步で活路が開けることと同義とも思えます。読んでいてふと思ったのは、詩の中に「風景」「外界」の実感的な手触りが欲しいかな、ということ。(2020年12月の講評にて)

杉本のいう「風景」「外界」の実感的な手触りを書くことが、スランプを抜け出す鍵のように思えた。ただ、「手触り」とは一体何か、どうやったらそれが書けるようになるのか、全く見当がつかなかった。このまま闇雲に手を動かしていても無駄だ思った私は、「そもそも詩とは何か」を考えることにした。

2.2 木村敏の「もの」と「こと」

スランプに陥った私は、ある一冊の重要な書籍に出会う。木村敏の『時間と自己』[木村 1982]である。この書籍で論じられている重要な概念の一つとして、「もの」と「こと」が挙げられる。「もの」とは、客観的に観測可能な、誰がみてもそこに明白に存在する事実や要素である。「こと」とは、「もの」を経験する主体の認識である。

木村はこの「もの」と「こと」という二つの概念を用い、詩について論じている。以下に引用しよう。

詩が普通の文章と本質的に違っている点は、詩が(中略)多くの場合さまざまなものについて語りながら、ものについての情報の伝達を目的とはせず、ことの世界を鮮明に表現しようとしているという点である。
(p.22) (傍点原文ママ)

木村曰く、詩とは「もの」を描写することによって「こと」を鮮明に表現しようとする営みなのだ。

この論に基づくと、先に2.1節にて紹介した詩は次のように見ることができまいか。すなわち、「何も残らないよりも何かが残ってしまうことの方が幾分も残酷である」は、過去の経験から私が解釈した「こと」である。私は詩において「こと」を「こと」のまま書きすぎていたのだ。「こと」に代わるべき「もの」の描写とは、一体何なのだろうか。

2.3 『プレバト!!』夏井の「説明するな!」

「もの」の描写に向き合うにあたり、テレビ番組『プレバト!!』(MBS 毎日放送)が大きなヒントとなった。『プレバト!!』とは、複数の芸能人・著名人

意味を、読者である他の研究者が感触を伴って納得する場を提供することで、今後の知の研究に新しい視座を与えることにあると論じている。

が特定のテーマに沿って作品制作(生け花・水彩画など)に挑戦する番組である。完成した作品を専門家が査定し、当該芸能人の才能の程度を評価する。中でも「俳句」の査定は、査定者である俳人の夏井いつきの辛口添削で知られ、人気を博している。

俳句は短い詩である。私は、詩作についてヒントを得るべく当番組の俳句の査定を何本か視聴する中で、査定者である夏井が何度も同じ指摘を繰り返していることに気がついた。その指摘とは、「説明するな!」である。以下に、お笑い芸人であるフルーツポンチ村上健志の句に対する夏井の添削を例とし、「説明するな!」とはいったいどういうことなのか論じる。

「年の瀬のスーパー」をテーマとし句作する回(2018年11月29日放送)での出来事である。村上には次のような句を詠んだ。

縄跳びの子に反応す自動ドア

母親の買い物をスーパーの外で待っている子どもが縄跳びするたびに、いちいち開いたり閉じたりする自動ドアの様子を詠んだ句である(図2)。

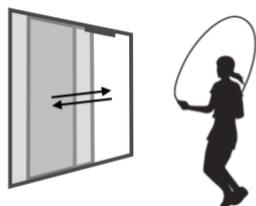


図2 縄跳びをする子どもと開閉する自動ドア

しかし、この句に対し夏井は「説明するな!」と評したのである。さらに、村上に「何を見たから、あなたは自動ドアが反応しているとわかったのか?」と問い、次のように添削した。

縄跳びの子に自動ドア開く閉じる

夏井が言いたかったことは何か。「説明するな!」とはどういう意味なのか。2.2節で言及した「詩とは「もの」を描写することで「こと」を鮮明に表現しようとする営みである」という木村の論をもとに、夏井の「説明するな!」という評価を私なりに解釈すると次のようになる。すなわち、村上が句に当初使用した文言「反応す」と夏井が添削した後の文言「開く閉じる」を比較すると、「開く閉じる」の方がより「もの」的であると言えるのではないか。「反応す」には、子の縄跳びと自動ドアの動きとのあいだに詠み手が見出した因果関係(つまりは、自動ドアは縄跳びに反応しているのだという擬人的な解釈)までもが含意されている。他方、「開く閉じる」はドアの物理的な(つまりは「もの」の)動きにただ言及されているのみで

ある。

夏井の言う「説明するな!」とはいわば、句で表現したい内容について、解釈(=「こと」)ではなく「もの」を書けということなのだ。

しかしながら、夏井が番組内で何度も「説明するな!」と繰り返していたことからわかるように、アマチュアは自らが接している「もの」を離れ「こと」を書いてしまいがちである。では、どのような心持ちで臨めば「もの」を描写できるようになるのだろうか。

2.4 情景内の「もの」に着眼し、描く

先の村上の例をもとに、「もの」の描写にたどり着くためにどうしたらよいか考えてみよう。

句作の過程を考えると、彼は番組が設定したテーマ「年の瀬のスーパー」からいきなり「縄跳びの子に自動ドア反応す」との句にたどり着いたわけではないだろう。句を詠むにあたっては、「子どもが縄跳びするたびに、いちいち自動ドアのセンサーが反応しドアが開いたり閉じたりする様子」という、図2にて示したような情景が彼の頭の中にあっただのではないかと考える。ここでいう情景とは、書き手の頭の中に思い描かれる外界の景色のことである。情景は主体の外部に存在するため、「もの」的であると言える。しかし、村上はこの「もの」的な「縄跳びと自動ドアの情景」を「こと」的に解釈し、「反応す」と書いてしまった。

どうしたらよかったのだろうか?夏井の「何を見たから、あなたは自動ドアが反応しているとわかったのですか?」という問いかけが非常に重要な意味を持つと考える。この問いかけを抽象化するならば、「あなたは情景においてどのような「もの」やその「もの」の様子に着眼したから、「こと」として解釈できたのですか?」ということになるだろう。

ここで、情景は複数の「もの」に分節化可能であると明確に述べたい。図2をもう一度見てみよう。一つの情景に対して、「縄跳び」「自動ドア」をはじめとするさまざまな「もの」の存在に着眼できる。「もの」的描写を実現するために重要なのは、このように自分の頭に思い描かれた情景をしかと見つめ、そこにあるさまざまな「もの」の存在に(情景を分節化することで)着眼し、着眼した「もの」を書き写そうと努めることなのだ。

私は期間Iにて木村と夏井の言明に出会い、詩とは「もの」の描写によって「こと」を表現する営みであることと、それを実現するためには自らが解釈した「こと」にまつわる情景について、自覚的に「もの」

を問うことが重要なのであると悟った。

3 期間Ⅱ：情景と体感の往還が「もの」の豊かな創起をもたらす

3.1 実際の経験に存在する「もの」を描くと縛られやすい

期間Ⅰにて悟ったことを元に私は、自らの経験やそこから生まれた解釈に紐づく情景を想起し、「もの」に着眼し、それらを随所に散らすやり方で詩を書けばよいのではないかと考えた。

例えば、2.1 節にて取り上げた詩の一節「何も残らないよりも何かが遺ってしまうことの方が幾分も残酷である」について考えてみよう。村上の句と同様に、この「こと」的な解釈も必ず何らかの「もの」に根ざして生じているはずである。

作品制作の期間から作品破壊の報を受けるに至るまでの記憶を掘り起こしてみると、さまざまな断片的な記憶が情景として想起される。一例を挙げると、作品を制作した古民家の情景である。この情景を見つめてみると様々な「もの」に着眼できる。たとえば、夏の古民家の畳を歩く私の裸足の裏にはイグサのカケラがはりついており、髪から汗が滴っていた。

このように、情景を想起しそれを見つめることで様々な「もの」が「こと」の裏に存在していたのだと思えることができる。ここで私は、これらの「もの」を散らして詩を書こうと試みたのだが、事はそう簡単ではなかった。試みは失敗に終わったのだ。完成したのは、想起した複数の「もの」と、それらを無理やりつなぐ言葉からなるつぎはぎだらけのぎこちない詩だった。

なぜ、ぎこちなくなってしまったのか。その理由は、作品を制作した古民家など、実際に私が見た情景の中に存在していた「もの」に縛られすぎた状態で詩を書こうとしたからではないかと考える。記憶を何度も想起し出す中で、実際の経験に内在した「もの」や情景の記憶が頭の中を支配し、それ以外の「もの」や情景の入る余地が無くなってしまったのだ。

詩は、必ずしも作者が自身の身体で実際に経験したことの報告文である必要はない。詩にとって、書き手が実際に見た情景やそこに紐づく「もの」の記憶が出発点となっても、詩を書きながら実際の経験においては出会わなかった「もの」がふと創起⁶され、詩に持ち込まれてもいいはずである。むしろ、そのよう

に「詩を書く中で、実際の経験にはなかった「もの」や情景がふと創起され、詩において意味を持つようになる」ことこそが重要であるはずだ。

そのような「もの」や情景が次々と浮かんでくるときがまさに「詩の自律性」を感じられている状態なのではないだろうか？私はそう仮説を立てた。では、詩を書きながら、リアルタイムに新たな「もの」や情景を創起するに至るにはどうしたらよいだろうか。

3.2 体感を自覚し、新たな「もの」を創起する

試行錯誤した結果、最終的に私は次のような仮説に至った。それは、経験や解釈から直接具体的な外部の「もの」を問うのではなく、

- ① 経験や解釈によって生じる体感を自覚し、
- ② その体感を生じさせるのは一体どのような「もの」なのか？と問う

ことで、実際の経験の縛りを解きやすくするのではないかと、いうことである。以下に例示しながら説明する。

たとえば、「作品が破壊された」という経験における「悲しい」という解釈をもとに詩を書きたい、と考えた時、さてどうするか。具体的な外部の「もの」を問う前に自己の内部に敢えて目をむけ、「悲しい」という解釈をしたときの自らの体感を言葉にしてみるのである。体感⁷は、決して客観的に観測できない、自己内部で醸成される感覚であるため「こと」に属する。では、作品が破壊された経験を「悲しい」と解釈したとき、私はどんな体感を有していただろうか？私の場合、悲しみゆえに「呼吸が浅くなる体感」がふと抱かれる（図3「①自覚する」）。

体感を自覚できたならば、そうした体感を抱かせるような具体的な「もの」は一体何があるのか/外界のどんな「もの」が自分にそのような体感を抱かせる可能性があるかを考えてみる。この時に重要なのは、現実の経験に縛られることなく、ただ体感だけに純粹に向き合い「もの」を創起することである。

先の例を引き継ぐと、呼吸の浅さを感じさせる「もの」を考えてみたとき、私は「水深2.5メートルプール」が浮かぶ。

なぜプールが浮かんできたのだろうか。幼い時に習い事で通っていたプールの記憶に思い至る。身長が伸びるのが遅かった私は当時、プールに足が届かなかった。先生の話聞くためには水面に顔を出し

なにかを表象することを「創起」と記す。

⁶ 以降、本稿では「想起」と「創起」を意図的に書き分ける。過去の具体的な記憶を思い出すことを「想起」、新たな

続けなくてはならないが、足が届かない私は水中で必死に犬かきをし、肺が圧迫されて苦しくなる体感を得た記憶がある。おそらくこの記憶が無自覚に影響する形で、私の現在の身長（165cm）からしても足が届きそうにない「水深2.5mのプール」が創起されたと考えられる（図3「②創起する」）。

このように、体感に基づいて創起される「もの」が何であるかは、豊かな個人固有性を孕んでいる。「呼吸が浅くなる感覚」にまつわる記憶や知識は人によって様々であるからだ。

解釈によって生じる体感を自覚することを通じ、個人に固有な記憶を伴って「プール」を創起できた。

「プール」という新たな「もの」は「作品が破壊された」という経験には直接的には全く関係しない。体感を自覚することを通じて、実際の経験の外側の「もの」を創起できたのだ。

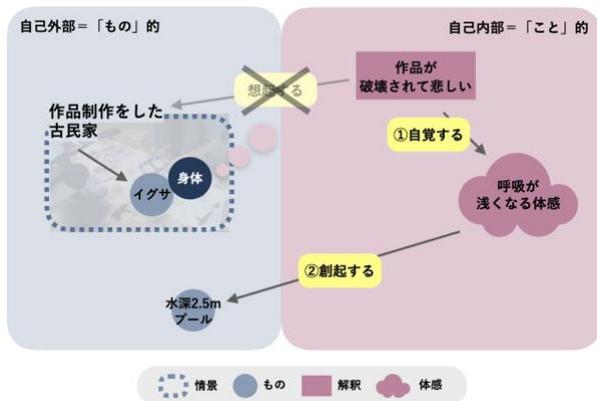


図3 ①体感を問い、②「もの」を創起する

3.3 「もの」が埋め込まれた情景を自覚し、他なる「もの」の存在に着眼する

体感を出発点とし新たな「もの」を創起した時、おのずからその「もの」が埋め込まれた情景が喚起されるはずである。例えば、先に創起された「水深2.5メートルプール」について考えてみよう。この「水深2.5メートルプール」という「もの」を頭の中で思い描いてみてほしい。この時、プールは真空の空間に概念として定位されるのではなく、具体的な情景に埋め込まれているはずである。屋内か屋外か？ 娯楽施設か競泳用か？ 大きさは？ 色は？ 明るさは？

私の場合は、「水深2.5メートルのプール」から、太陽が照りつける屋外のプールやその周りの情景がふと浮かぶ。この詩を書いた時期が残暑だったことが関係しているのかもしれない。太陽にジリジリと照らされる感覚が、詩作の際にも残っていたはずだ。

このように体感から「もの」を創起する時には、おのずからその「もの」が埋め込まれた情景が立ち上がる

のだ（図4左側中段「立ち上がる」）。

詩を書く上では、このように立ち上がった情景を自覚することが非常に重要であると私は考えている。情景を自覚すれば、それをまた複数の「もの」に分節化/着眼できるからだ。先の屋外の水深2.5メートルプールの例で言うならば、「太陽」である（図4左側中段「太陽」）。

3.4 情景に身体を入れ込み新たな体感を得る

立ち上がった情景によって得られるのは「太陽」などの別の「もの」だけではない。情景にからだを入れ込んでみることで情景内に着眼できる多種多様な「もの」と身体とが相互作用し、さらに新たな体感が得られる。屋外の水深2.5メートルのプールに自分の身体を入れ込んでみよう。水深が身長を超えていることから「私がプールで溺れる」という相互作用が生じ、水が顔に容赦なくかかり、「カルキ臭い」という体感が生じてきた（図4中央「得る」）。

得られた体感からまた、3.2で論じたように新たな「もの」を問うてみる。「カルキ臭い水」が張られている場所といえば…？ 小学校のプールが浮かぶ。衛生管理の観点から常に大量の塩素が投入されていた記憶がある。プールの隣に小学校の校舎が創起され、「小学校と、そのプール」という新たな情景が立ち上がる（図4左側下段「立ち上がる」）。

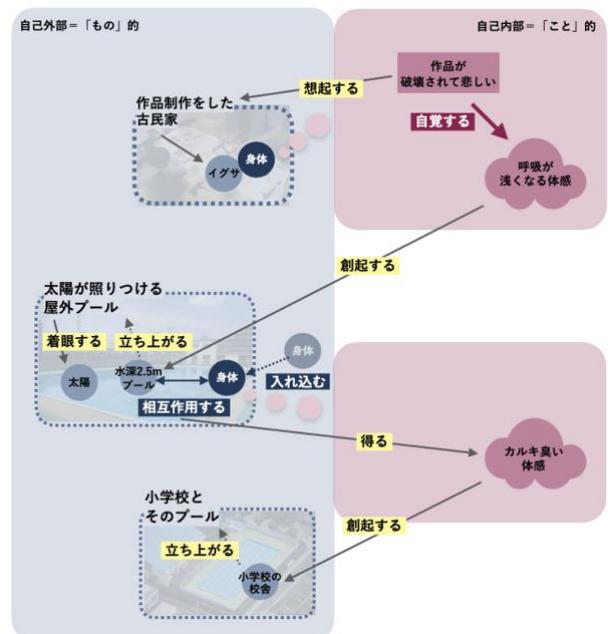


図4 新たな情景、体感、「もの」を得るプロセス

3.5 情景と体感の往還で「もの」を創起し続ける

ここまでの過程をおさらいしよう。まず私は、作品が破壊されたという経験に基づく「悲しい」という解釈から、呼吸が浅くなる体感を自覚し「水深2.5メー

のはどういう時だろう??と考へながら詩を書いたと記憶している。「心がきゅうっと苦しくなる感じ」とはまさに「体感」である。私は無自覚にも、体感を意識しながら詩を書いていたのだ。だからこそ「詩の自律性」が生じていたのではないか?

さらに図1の詩は、一つの連に一つの情景が描かれる形で構成されており、それらの連は互いに独立している。私は当時、体感に基づいて「もの」を創起し情景を立ち上げては一つの連とし、書き終わったら筆を止めて再び体感に思いを馳せ、新たな「もの」を創起できたら再び一連書く、ということを繰り返していたのではないかと推測する。つまり、「詩の自律性」は一連ごとに一旦途絶え、体感を問うことで再び復活していたのではないか。

現在の詩作においても、途中で「詩の自律性」が途絶えてしまうことは往々にしてある。ただ、情景と体感の往還が重要であると悟った今では、自らの得ている体感を敢えて自覚的に問うことによって「もの」を創起したり「もの」から立ち上がる情景にからだを入れ込むことで「もの」の創起を次々と引き起こし、ある程度意図的に「詩の自律性」を取り戻せるようになった。

4.2 詩作においては「体感」が重要

「もの」と「こと」のちがいを意識し両者を往還するという見方は、詩作に特化した主張ではなくあらゆる創造的活動において論じられてきたことかもしれない。ただし、本稿において新規なのは、詩作ではただ「こと」を意識するのではなく、中でも「体感」を自覚することが重要であると悟った点にある。

解釈(先の例でいえば、「作品が破壊されて悲しい」など)は「こと」に属する。解釈は時に論理的な思考を伴う。他の創造行為、例えば論文執筆などにおいては(論理的)解釈が新たなものごとの創起をもたらすことがあるだろう。しかしながら詩作においては、3.1節で論じたように(論理的)解釈や実際に身体が経験したものごとから直接「もの」を創起しようとしても貧弱な創起しか起きなかった(図5を参照)。解釈が生じたときそこから自覚的に体感を問うことで、体感に基づいた「もの」を創起する事が極めて重要なのだ。体感を介するからこそ、実際の身体経験の外側に到達する豊かな創起を引き起こせるのである。

4.3 詩作における一人称研究の重要性

情景と体感の往還という「こつ」を掴んだ私は、その後それを意識して詩作を続けた。そして、詩作の一

人称研究を始めて9ヶ月となる2022年の1月には、詩誌『現代詩手帖』における新人投稿欄の掲載枠に私の書いた詩[今宿 2022]が掲載される快挙を得た(掲載倍率は100倍以上であり、毎月チャンスがあるもののこれまで一度も掲載されることはなかった)。一人称研究を通じて詩作の力が大きく向上した一つの証左ではないかと考える。

一人称研究の目的は、これまで誰も見出したことのない新たな仮説を得ることにある。自ら実践と考察を繰り返し行う中で詩作についての新たな仮説に辿り着き、その仮説を糧に詩作の力が向上したことは、詩作における一人称研究の重要性を示唆するものではないだろうか。

4.4 「もの」の創起のメカニズムは不明のまま

本研究を通じて、情景と体感の往還によって「もの」の創起が連鎖するとき「詩の自律性」を感じるのだ、という結論に辿り着いたものの、まだ一つ明らかになっていないことがある。それは、なぜ私は体感を元に実際の経験の外側の「もの」を創起できるのか、そして創起した「もの」になぜ納得できるのか、ということである。「呼吸が浅くなる」体感から、なぜ私は「水深2.5メートルプール」を思いついたのか。「標高の高いまち」「サウナの中」などを創起する可能性も十分にあったはずである。これは人工知能や発想の研究領域で問題視されている「フレーム問題」とも関係する認知のあり方だろう。

よりよい「もの」創起のメカニズムについて、さらなる一人称研究によって探究する。

参考文献

- [ポランニー 2003] マイケル・ポランニー, and 高橋勇夫 訳, 暗黙知の次元, 筑摩書房, 2003.
- [諏訪ら 2015] 諏訪正樹・堀浩一 編著, and 伊藤毅志, 松原仁, 阿部明典, 大竹美保子, 松尾豊, 藤井晴 行, 中島秀之 共著. 一人称研究のすすめ: 知能研究の新しい潮流, 近代科学社, 2015.
- [諏訪, 青山, 伝 2020] 諏訪 正樹, 青山 征彦, 伝 康晴, 特集「生きる」リアリティと向き合う認知科学へ 編集にあたって, in 認知科学, 27巻, 2号, p. 89-94, (2020).
- [諏訪, 藤井 2015] 諏訪正樹・藤井晴之, 知のデザイン, 近大科学社, 2015.
- [堀内ら 2020] 堀内隆仁・諏訪正樹, 「アスリートとして生きる」ということ: 競技・生活が一体となり身体スキルを学ぶ様を描く物語, in 認知科学, 27巻, 4号, p.443-460, (2020).
- [木村 1982] 木村敏, 時間と自己, 中央公論社, 1982.
- [今宿 2022] 今宿未悠, まな板の上の夜, in 現代詩手帖, 思潮社, 2022年2月号, p.175, (2022).